

(1) 地域総合研究センターの活動報告 (2005.4~2006.3)

地域総合研究センターは、地域社会と大学を結び、地域の課題に取り組むとともに大学の教育・研究活動をより意義あるものにする様々な活動をおこなっている。

地域総合研究センターの活動は、おおむね次の4つに分類することができる。

- ① 地域活性化のために研究センターが独自に企画立案して研究を進めている活動
- ② 地域社会から大学（代表者）としての学長を含む）に対して協力依頼があったものをセンター研究員である本学教員（グループ）が引き受けて行なっている活動
- ③ 地域社会から地域総合研究センターに対して協力依頼があったものに対して、センター研究員である本学教員（グループ）が引き受けて行なっている活動
- ④ 地域社会から、研究分野からみて妥当と思われる教員個人に対して協力依頼があったものを、その教員がセンターに持ち込んで行なっている活動

表1. 地域総合研究センターの活動の分類

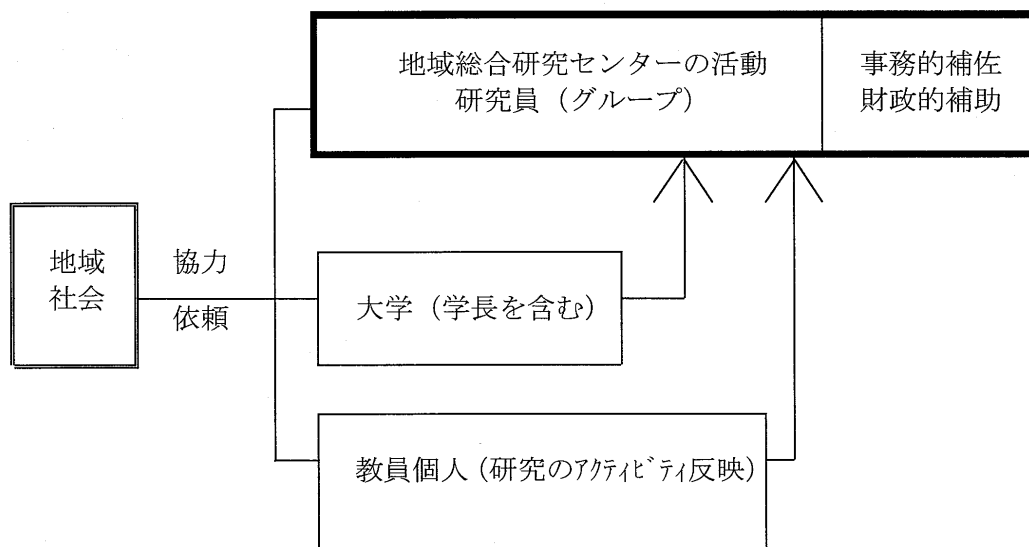


図1. 地域総合研究センターの活動の受け入れルート

ここでは、2005年4月より2006年3月までの活動について以下の項目について報告する。

1. 地域づくり・まちづくりに関する講演会などの開催

- ・『人にやる気・村に活気・地域づくり』学習会 Part 3
「農山村レストランのモデル＝究極の女性グループ活動ーお酒以外は買わないレストラン経営ー」
- ・オープン・カレッジ・パネルディスカッション
『女性起業家に学ぶ 街おこし・村おこし・自分おこし』

2. 地域づくりの事業の実施と支援

- ・山形村の地域福祉経営に関する事業
- ・安曇野市（豊科・穂高）町づくり実践活動事業
- ・ユニバーサルデザインの普及活動
- ・コミュニティ・ビジネスの普及活動

3. 地域総合研究センターが主催する人づくりのための学習活動の実施

- ・生活記録による世代間交流（三郷村及木老人クラブとの交流学習会）
- ・その他の学習活動

4. 地域における学習事業への参画・支援・研究

- ・新聞をのみこむ講座
- ・成人講座「女と男きらめき教室」
- ・ユネスコアジア太平洋・コミュニティ学習センター・ワークショップへの参加

5. 地域社会への囲碁の普及と世代間交流の活性化

- ・オープン囲碁教室の開催
- ・地域の囲碁大会開催への協力

1. 地域づくり・まちづくりに関する講演会などの開催

1) 「人にやる気・村に活気・地域づくり」学習会 Part3

「農山村レストランのモデル＝究極の女性グループ活動－お酒以外は買わないレストラン経営－」

「人にやる気・村に活気・地域づくり」学習会は、自らの地域の課題を捉え、地域の個性や風土を生かして、知恵を絞って地域づくりに取り組んでいる地域とそれを担う人々に学び、実践につなげていこうという趣旨で2003年度よりスタートした。学習会は、各地で先進的に取り組まれている地域づくりの実践について、地域づくりを担うキーマンの講演会と実際の取り組みを現地で学ぶ研修ツアーの二本立てによって実施されてきた。これまで、岐阜県大野郡清見村（当時）の「行政が主導するむらづくり」（2003年度）、滋賀県犬上郡甲良町の「グランドワーク方式による集落からのまちづくり」（2004年度）をテーマとして実施してきた。

2005年度は、「農山村レストランのモデル＝究極の女性グループ活動－お酒以外は買わないレストラン経営－」をテーマとして、6月24日に講演会、9月28～29日に研修ツアーを行った。

講演会では、兵庫県豊岡市日高町金谷で「山女料理 阿瀬」を営んでいる女性グループ代表の中西禮子氏と、協力者で県職員として兵庫県の地域づくりで中心となって活躍されてきた森正氏を迎え、玉井袈裟男研究員が聞き手になって、事業の概要や地域づくりへの示唆などについて学んだ。講演会には学生を含めて約100名が参加して活発な質疑応答も行なわれた。また、研修ツアーには31名の参加者があり、玉井研究員がインストラクターを務め、兵庫県日高町の「山女料理 阿瀬」などを視察した。講演と研修旅行の詳細な内容については、報告を掲載している。

2) オープン・カレッジ・パネルディスカッション「女性起業家に学ぶ 街おこし・村おこし・自分おこし」

地域づくりにおいて、女性がいきいきと活躍することは、もっとも重要な鍵である。そして地域には元気に地域を担う多くの女性たちがいる。その女性たちから学び、それを通して女性の地域づくりのネットワークを創っていこうという趣旨で、オープン・カレッジ「女性起業家に学ぶ 街おこし・村おこし・自分おこし」（パネルディスカッション）が、2005年8月5日に催された。女性たちの起業事例を語っていただき、共生社会の女性による地域づくりの可能性について考えることを目的として、本研究センター研究員の今井朗子氏をコーディネーターとし、各地で自ら起業して活躍されている女性3名をパネラーとしてパネルディスカッションをおこなった。パネラーには、NPO 法人和楽理事長の座光寺良子氏、精密組立の安工業代表・宮坂安壽恵氏、比叡ゆば本舗「ゆば八」代表取締役・八木幸子氏の3人を迎えた。このシンポジウムは、女性の地域づくりのネットワークづくりとして期待されることから、今後も取り組んでいく予定である。なお、講演の詳細な内容については、報告を掲載している。

2. 地域づくりの事業の実施と支援

地域総合研究センターは、地域づくりに関わる研究を行うとともに、地域のニーズに応え実際に参画しながら、地域づくりを支援することを活動の重要な柱に据えている。

住民が行政に依存せず、自ら地域を創造していくために、行政と住民の協働や住民による主体的な町づくりへの取り組みが各地で展開されている。これらの地域の動きに応じて、以下のような地域づくりの事業の実施と支援をおこなった。特に住民と行政の協働による町づくりやコミュニティ・ビジネスによるコミュニティの活性化などに重点を置いて取り組んだ。

1) 山形村の地域福祉経営に関する事業

山形村・山形村社会福祉協議会と松本大学は、2002年度から山形村の地域福祉経営についての共

同事業を実施している。2005年度は、2004年度に開始された住民が参画して地域の未来や地域福祉のあり方を考える「創ろうやまがた・プロジェクトY」に取り組み、大学からは教員と学生が参加して、地域の財産や資源を探し、課題を明らかにしようというフィールドワークを実施するとともに、コミュニティ・ビジネスの事業として3年目となる「むかごプロジェクト」を実施した。また2005年度からの事業として、障害者を対象とした旅行（1泊2日）のプログラムを大学のバスを使用して実施した。さらにこのような共同の事業を発展させるために、2006年4月には、多機能型サービスセンター（宅幼老所）の「コミュニティハウス建部の里」が開設される予定であり、教員・学生の活動拠点として期待される。

2) 安曇野市（豊科・穂高）まちづくり実践活動事業

安曇野市となった旧南安曇郡豊科町において、地域のきめ細かな課題への対応を住民が主体となってとりくむために、住民と行政と一緒に学習し実践するという「豊科町まちづくり実践活動事業」を2004年度より実施し、本学教員がコーディネーターとして、また学生もゼミ活動の一環として参画し、地域行政コースのゼミナール活動にも位置づけて協力をおこなってきた。

2005年度は、合計15回にわたるワークショップや討論、準備作業などを通して、その成果として、住民が企画し実施する「健康づくり講座」の開催、7月に町をあげて開催される「あずみの祭り」における住民によるイベント「さよならとよしな」の開催、重柳区における集落モデル事業による「高齢者サロン」の開設など、実際の地域づくりの実践に結びつき、高い評価を得ることができた。また、旧穂高町においても学生が参画してコミュニティのあり方に関するワークショップを3回実施した。これらの活動は、新しく合併によって誕生した安曇野市においても引き続き展開される予定である。

3) ユニバーサルデザインの普及活動

① まつもとユニバーサルデザインネットワーク研究会 平成17年度の活動

この研究会には、松本大学も会員の一つとして参加しており、住吉広行副学長を会長として派遣している。また清水聡子助教授も構成員の一員として参加している。

平成17年度は、UDの考え方を社会へ広く普及することを目指して、UDオペラの開催を企画した。長野県コモンズ支援金という補助金もいただき、オペラ入場料なども加えて実施した。子どもから高齢者まで、障害を持っている方々も入り、プロの方にも少数ではあるが出演していただきながら、基本的には一般市民から出場者を募集する形で実施した。

本学は練習会場を提供するほか、施設等の貸し出しにも便宜を図り、関係者からは大いに喜ばれた。本学教員の子どもやその友人も参加するなど、夏から秋にかけてユニークな経験を積んだ児童も多数に及んだ。信州大学の学生、音楽の先生などこれまでUDとは無縁だった方々も興味を持って参加し、UDの考え方を広げるという点では、テレビなどのマスコミにも大きく取り上げられ一定の成果を得たと思われる。

UDオペラ以降は、起業とも結び付けようと、製品開発に取り組んでいる方々を招いて研究セミナーなどを開き、会員の視野を広げようと考えた。

また松本市市内においてもUD研究会が持たれており、これに関しても意見やアドバイスを述べたりしている。

・活動の経過

5月30日（月） 宿泊施設のUD ホテル玉の湯 山崎社長
UD製品の紹介 E・C・O 依田社長

6月20日（月） UD製品の開発経緯 (株)日邦バルブ技術部技術課 吉澤氏
ユニバーサルデザインオペラ「魔法の笛と鈴」練習（～10月）

- 松本大学、新村公民館、まつもと市民芸術館 計20回
- 7月29日(金) 定例会
- 8月29日(月) 定例会
- 9月20日(火) 定例会
- 10月21日(金) 第2回ながのユニバーサルデザイン松本大会
ユニバーサルデザインオペラ「魔法の笛と鈴」公演
まつもと市民芸術館
- 10月22日(土) ながのユニバーサルデザイン松本フォーラム
・基調講演「生き方・考え方としてのユニバーサルデザイン」
講師：ばばこういち氏
- ・UD アイデアコンクール表彰式
- ・パネルディスカッション「観光のUD」
梶本久夫・赤広三郎・佐藤博康・花村ふみ子・ばばこういち
- ・UD 交流会
- 12月20日(火) 「UD ビジネスについて」UDC 代表梶本久夫氏
- 2月22日(水) 「UD のガイドライン」 長野県工業技術総合センター 長瀬研究員
- 3月23日(水) 「ものづくり創造塾の事例発表」
松本市技術アドバイザー 宮阪 徹士氏

17年度総会

- ・補助金等 長野県 commons 支援金／松本市／松本商工会議所 計255万円
- ② 「ユーザー目線によるものづくりセミナー」長野県商工部産業技術支援課
セミナー 「誰もが使いやすいデザイン (UD)開発を目指して」 ブエナビスタ
講演会 「ユニバーサルデザインの最新情報」
パネルディスカッション 「衣食住環境のユニバーサルデザイン」
に参加し、パネラーをつとめる(住吉広行)。
- ③ ユニバーサルデザイン住宅リフォーム研究会(ユニコス)
この研究会は、昨年度でその任務を修了し、これを受けて平成17年度は、ユニコスが商工会議所と連携を取りながら、施工者と注文者との間を結びつける形で事業を継続している。ここでは、顧問としてこの事業の継続に本学教員(住吉広行)が参加している。
また、本学生も演習Ⅲ(白戸洋担当)の一環としてユニコスの事業に参画している。

4) コミュニティ・ビジネスの普及活動

地域総合研究センターでは、コミュニティの課題を小さなビジネスを興すことで解決していく、コミュニティ・ビジネスを、身近な地域で住民が主体的に地域を創造していくための有効な手段として位置づけるとともに、学生が地域において実践的に学ぶ機会と捉えている。2005年9月には、2004年度に発足した「ながのコミュニティ・ビジネス支援センター」を発展させ、大学の機関として「地域づくり考房ゆめ」として開設した。地域総合研究センターとして、「地域づくり考房ゆめ」と協力して引き続きコミュニティ・ビジネスについて研究・実践に取り組んでいる。

① コミュニティ・ビジネスの支援・普及・研究活動

コミュニティ・ビジネスの支援・展開・研究活動としては、地域で実践されている実際の事業に対する支援およびコミュニティ・ビジネスに関する普及・研究活動を行なった。実際の事業に対する支援としては、前年度に引き続き、松本一本ネギ再生プロジェクトや山形村のむかごプロジェクト、NPO 法人「人にやさしい街づくり推進協会」による人力自転車タクシーの「ベロタクシーによるタウンモビリティ事業」などを行なったが、それぞれ著しい成果

をあげ、特に松本一本ネギは市場でブランド化に成功し、全国的にも注目を集め、高い評価を得ている。コミュニティ・ビジネスに関する普及活動としては、長野県商工会連合会の研修等における講演会に教員を講師として派遣するなど、コミュニティ・ビジネスの普及活動を行なうとともに、コミュニティ・ビジネスをテーマとした教育活動を展開している。例えば、地域開発の講義（白戸洋担当）の一環として、2005年8月には東御市商工会の協力を得て田中商店街においてフィールドワークを行い、地元関係者と意見交換を行なうなど、演習や講義のアウトキャンパスとして、コミュニティ・ビジネスの事例を活用している。またこれらの活動について研究を行ない、その成果を学生が日本公民館学会や長野県生涯学習センターによる研修会などで発表した。

② コミュニティ・ビジネスを通じた街づくりの実践への参画

コミュニティ・ビジネスは地域の課題を解決する事業であり、研究センターではコミュニティ・ビジネスを中核とした、以下のような街づくりの実践活動に参画している。

イ 松本駅西口町づくり事業

松本駅西口に位置する巾上西町会は、高齢化が進む古い住宅街であったが、松本駅の改築にあわせた西口駅前ひろばの整備と道路整備事業によって、住民の三分の一が地区外へ移転し、コミュニティの崩壊の危機に直面している。そのような中で、残った住民が力をあわせて、「歩いて暮らせる街」や「アルプスの景観を守る街」を理念として掲げて街づくりの活動を始めたが、総合経営学部の地域行政コースの演習のアウトキャンパスを実施したことを契機にして、学生・教員が町づくりに参画している。特に駅前ひろばに高齢者の溜り場として、あるいは生甲斐づくりの仕事の場として、蕎麦屋を開店する計画が進んでおり、町づくりコミュニティ・ビジネスをテーマとした演習（高橋雅夫・柳澤聡子・白戸洋担当）の一環として町会と大学が連携して町づくりを展開している。地域の住民意識調査や同じような状況にある長野駅東口の区画整理事業の視察、活性化をめざしたイベントや朝市の企画など、学生がかかわって進めている。2006年には新しく開設された観光ホスピタリティ学科における社会福祉のカリキュラムの一部として社会福祉現場実習のフィールドとして位置づけられる予定である。

ロ 松本市中心市街地活性化事業

松本市中心商店街は、土地区画整理事業など一連の再開発事業が完成し、ハード面では都市機能が整備されている。しかし、あいつぐ立ち退きや移転、道路拡張による人の流れの変化、昨今の不況などによって、中心商店街をとりまく環境は厳しい。そのような中で松本商工会議所と松本市、そして本学が連携して、町づくりの拠点として、「ふらっとプラザ」が2005年に開設した。ふらっとプラザは、町づくりに関心のある事業者や市民、学生などが集まり、情報交換や事業を通じて交流し情報発信する拠点として設置され、手づくり商品のレンタルボックスショップやインフォメーションセンターも併設している。ふらっとプラザでは、本学教員を講師とした講座や学生の参加するイベント、学習活動などが展開されている。また地域行政コースの演習（高橋雅夫、白戸洋、柳澤聡子）の一環として学生が運営・企画に携わっている。演習での学習から、松本市外のテーマ別ガイドマップづくりや街のバリアフリー調査などの実践活動がうまれている。

5) その他

以上の事業に加えて、長野県内の地域づくりの団体・グループのネットワークである「地域づくりネットワーク長野県協議会」と共同で、地域の自立に関する学習活動の「長野県まちむら解体新書塾」の開催や、NPOなどをネットワーク化し、市民主体の地域づくりを目指す「アルプスフロント懇談会」、グリーンツーリズムに関わる事業、農業を特産品の開発で活性化する事業、市民が

公共事業に積極的に参加して地域に貢献する道づくりを模索していこうという国土交通省飯田国道事務所市民参加型道づくり事業、など、様々な地域・分野で地域づくりの実践活動へ参画し、それらを踏まえた研究を実施した。

3. 地域総合研究センターが主催する人づくりのための学習活動の実施

地域総合研究センターでは、地域の課題を解決する人づくりとネットワークづくり、さらには特に高齢者の知恵の活用を目的として、学習活動を企画・運営している。2005年度に実施した活動の主なものは、2002年度より始まった生活記録による世代間交流事業「三郷及木老人クラブとの交流学習会」、2004年度より開始した「キャリアスクール（一念発起の会）」と2005年度より新たに開始した「勿体無いをそのままにしない会」である。

特に、「三郷及木老人クラブとの交流学習会」（担当：玉井・岩原）は、昭和30年の農村での生活について、交流学習会を通じて記録を作成し、その成果を地域づくりなどに活かしている。特に交流学習会に参加した及木老人クラブによって、学習会で見直された行事をより多くの人々に伝えるべく、近くに開設された「国営アルプスあずみの公園」に再現された民家において、農村における生活文化や知恵を伝えるべく、毎週週末に安曇野の歴史と生活文化を紙芝居として、ボランティアとして「実演」している他、結婚式に再現などを行い、成果を活用している。

また、「キャリアスクール」は、人が集まり楽しく話し、集まるごとに「卵（成果）を産む」という月1回開かれる生涯学習の活動である。「勿体無いをそのままにしない会」は地域にある様々な宝（資源）を活用し、地域づくりを進めるかという学習会であり、月1回開催されている。いずれも玉井研究員を中心として参加者が主体的に運営している。

4. 地域における学習事業への参画・支援・研究

1) 社会教育施設、公民館等との協働・連携・協力

地域総合研究センターでは、信州において育まれてきた地域における学習活動を地域づくりの重要な基盤として位置づけ、松本市をはじめとする県下の公民館などの社会教育機関と連携してきた。2005年度においても様々な学習活動に取り組み、昨年度から引き続き、松本市南部公民館との共催事業である本センター研究員（高橋雅夫、増尾均）のコーディネートによる「新聞をのみこむ講座」、本センター研究員（白戸洋）が総合コーディネーターとして参加している塩尻市塩尻東公民館の成人講座「女と男きらめき教室」などに加え、多くの公民館や社会教育施設において社会教育の推進に関わる講演の講師や講座のコーディネーターとして教員を派遣している（詳細は松本大学アニュアルレポートを参照のこと）。また、地元の新村公民館の事業には、日常的に協力し、学生が視聴覚委員や館報編集委員などをつとめるなど、大学として積極的に参加している。また、2005年12月には、このような日常的な活動が評価され、本学で日本公民館学会が開催された。

また、長野県専修学校各種連合会視察研修会において、大学・短大経営について基調報告（住吉広之）を行った。（P.336 参照）

2) ユネスコ・コミュニティ学習センター事業への参画

ユネスコバンコク事務所の APPEAL (Asia-Pacific Programme of Education for All) で、1998年より始まったコミュニティ学習センター事業は、地域社会や大人、若者、子供などすべての世代にとって、様々な形の学習を学校外において行うための組織の充実を推進している。2006年現在、コミュニティ学習センターは、アジア太平洋の23カ国に導入されており、アラブ諸国、アフリカにも広がりを見せはじめている。多くの国で、NFE（ノンフォーマル教育）への予算が少な

い現状から、住民、地域、行政が共同して学習環境を組織的に向上させる、という手法は、現実的かつ有効な戦略として受け入れられている。

コミュニティ学習センターが識字を中心とした教育機関として機能する一方、地域開発を調整する地域の枠組みとして機能するよう、他の機関との連携、ネットワーク強化の必要性が課題とされてきた。2004年、日本政府による EFA (Education for All: 万民のための教育) 信託基金により、この分野における地域プロジェクトが実施され、2005年9月には、インドネシア、バンドンにおいて、アジア地域ワークショップが開催された。この会議では、コミュニティ学習センターと多様な機関とのパートナーシップの形成、例えば、政府、NGO、大学、民間、企業との協力について、事例報告、現地視察などを通し、モデルネットワークの経験の共有、国およびアジア太平洋地域レベルでのネットワーク形成などの可能性が、議論、検討された。

本学は、2004年9月にユネスコ - JICA の生涯学習シンポジウムの一環として松本市新村公民館訪問をおこなったのがこのコミュニティ学習センタープログラムに関わったきっかけである。さらに上記のインドネシアで開催された地域ワークショップで、松本大学から柳澤聡子専任講師が出席し、新村の公民館と大学の連携による地域づくりについて発表を行なった。

3) 都市・農村交流事業の展開 - 科学研究費対象事業 -

安曇野(旧豊科町)と武蔵野市との間で行われていた交流事業に、新しく観光という視点を盛り込んで、活動を継続・発展させようという機運が豊科町の枠を超えて盛り上がってきていた。これと「安曇野における滞在型グリーンツーリズムの探求」をテーマに繰り広げる松本大学・松商短期大学の研究活動(代表:住吉広行)が結びついて、新しい形態の地域と連携活動を発展させてきている。詳しい報告は次章で紹介される。

5. 地域社会への囲碁の普及と世代間交流の活性化

1) 活動の意義

地域総合研究センターとして取り組んでいる活動の一つに、華々しくはないが地域社会の中で着実にその存在感を高めている、囲碁の普及活動がある。その意義と2005年度の活動内容とに分けてまとめておきたい。今回は囲碁に関する活動を総合的にまとめて報告するのが初めてなので、過去の経緯に付いても簡単に触れておくことにする。

① 地域社会における役割とその評価

中野和朗・住吉広行・重泉重徳・峯岸芳夫が中心となり、サポータ教員である倉科陽子・中野静子の諸氏の他に、囲碁部の学生が関わって、地域社会における囲碁の普及活動、さらに大きい目で見れば、日本の伝統文化を継承し発展させる事業に携わって来ている。

囲碁を通して老若男女の交流も盛んになり、高齢者にとってはボケ防止、生きがいづくりにもつながるので、長期的な視野で見れば地域社会の精神面からの「健康づくり」にも貢献する活動になっている。

松本大学において展開されているこのような活動は、日本棋院長野県本部においても高く評価され、特に中信地域の囲碁の普及・発展に大きく貢献し、今や「なくてはならない存在」として認識されるまでに至っている(例えば、信州囲碁新報2006年5月1日号)。

また大学が文部科学省からの補助金(特色GPや伝統文化の授業化などによる)も得て、①備品として碁盤や対局時計などを着々と揃えているため、②さらにはプロ棋士を招いて高い知識と技術、さらには囲碁に取り組む心構えなども指導していただけることから、他にも③大学における囲碁大会運営能力の高さ(事務職員(特に窓口対応をしている腰原季都子氏)、

学生の大会運営への参加を含む)、④県下における大会会場としての利便性の高さ(インターに近い、駐車場が広いなど)、⑤行事を紹介する記事の執筆など文化的な技能のレベルなどから、地域社会の囲碁愛好家・団体からも高い評価を得ている。

地域社会に開かれ、地域社会の活性化に貢献するという意味で、囲碁という限られた範囲においてではあるが、松本大学の存在感を示す事が十分にできている活動分野の一つといえる。

② 広報活動的な側面

全く別の観点からみると、幼稚園・保育園から小・中・高校生までが松本大学へ足を運んでいることになる。また丁度大学進学を考えようとしている孫を持つ頃の高齢者も、何度も松本大学の施設や学生を見ているのである。中野学長や住吉副学長も、大会においては大学を代表して歓迎の挨拶なども行うので、時々の特ピックスを混ぜて、大学の宣伝もできている。最近では高校生の囲碁選手権大会も松本大学を会場に行われている。この意味では、キャンパス見学会と何の違いもなく、近いうちに、「囲碁大会に参加して松本大学が気に入ったから」という理由で、本学を志願してくる可能性も出てくると思われる。

2) 活動の内容

① 囲碁大会の開催・共催・協力など

a) 定例のオープン囲碁教室の開催

オープン囲碁教室(担当:峯岸芳夫)を地域社会に向けて開催しており、囲碁の授業を受けている学生が地域の方々との交流を深めながら、囲碁の力もつけてきている。地域社会からの参加者は12名程度である。この開催に当たっては、碁会所を運営されている方々とも相談し、理解を得るというプロセスを踏んでいる。

b) 恒例の4大会の共催・主催

(イ) 第12回中南信地区団体戦「親睦囲碁大祭」(主催:日本棋院中信支部) 12月23日

競技委員長:住吉広行 80団体240人と役員等約250名参加

この大会は中南信地区で行われている、日本棋院長野県本部・中信地区本部が主催する最大の名物イベントである。当初勤労者福祉センターの一室を使って開催されていたが、徐々に参加チームも増え、30チームを超えたあたりから手狭になってきていた。そこで、新しく開設なった松本大学を利用してはと住吉から提案し、現在に至っている。松本大学に会場を移してからは、爆発的な参加者増で、いまや長野県下で最大の集客を誇る大会としての地歩を固めており、一昨年はわざわざ長野県本部の職員がその成功の秘密を探るということで、見学に見えた。2004年度の84団体には若干及ばなかったものの、切りの良い80団体(1団体3名の構成)が集った。スイス方式で行われるため、参加者は終日囲碁三昧の時間を過ごすことができたものと推察される。最近では帰り際に本学学生や職員に労いの言葉をかけてくださる参加者も増えてきている。

(ロ) 第6回松本大学「ヒカルの碁」少年少女大会(主催:松本大学) 12月23日

参加者64名 招待:加藤祐輝五段

この大会は、マンガ「ヒカルの碁」がブームになったときに、日本棋院が音頭をとって全国で大々的なイベントを企画した。このときに一就塾でつながりのあった藤沢一就八段から、正式に松本大学での開催依頼がありそれを受けて始めたものである。松本大学の名前が少年ジャンプ誌に掲載され、全国でも珍しい大学を会場にした(多くの場合公共のセンターや公民館など)大会となった。地域からボランティア(約80名)にも参加していただき初心者の方の指導体制も完備して、約130名程度の子供達を全県から集め(長野県では大町市・茅野市にも会場が設定されていたが)、盛大に開催された。その様子は全国紙である「碁」Weeklyにも報じられた。このとき参加した子供達も強くなり、いまや大人に混じって団体戦に出

場したり、囲碁の名門緑星学園に通いながら日本棋院の院生となりプロ棋士を目指す者や、プロ棋士の内弟子となって将来を夢見る者も、数名ではあるが出てきている。それから数えて今年度は第6回目となっている。全国一斉の大会が松本大学開設年度の夏休みに行われたため、12月と併せて、初年度は2回の開催、3年目も夏休みを利用してプロ棋士4名（吉岡薫・下島陽平・加藤祐輝・金賢貞の各氏）の指導碁を行ったので2回の開催となった。以降は12月のみの年1回の開催となっている。この大会の成績優秀者にはプロ棋士の指導碁がプレゼントとして用意されている。大会運営には、米山毅氏と本学囲碁部学生が当たっている。

(ハ) 悟空記念碁会（主催：実行委員会、含む中野・峯岸）9月18日 参加者180名

招待：中根直行七段・金賢貞二段

囲碁界におけるペンネーム水簾堂悟空を持つ故小柴善一郎氏の、これまでの中信地区における囲碁発展への貢献を忘れないようにと、お世話になってきた方々を中心に何か記念になるものをとということで企画されたのがこの碁会である。悟空の弟子を自認する八戒こと峯岸芳夫氏と信州大学時代の同僚・知人である中野和朗氏らを発起人・実行委員として始められた。初回の最強の部の優勝者は、悟空氏から幼い頃教えを受けた住吉哲志氏であった。

今年度はその第2回目の大会であった。関係者が県内外から多数集まり、故人を偲びながら、対局に没頭した。今回は囲碁の国際化も意識して、韓国出身の金賢貞二段とその夫君の中根直行七段を招いての盛大な碁会となった。

(ニ) テレビ松本三冠囲碁大会 2月26日、参加者250名

競技委員長：住吉広行、役員：峯岸芳夫、囲碁部の学生など

開局30周年を前にして囲碁大会を開催することを決めていたテレビ松本が、松本大学にその運営を依頼してきた。松本CATVは既に塩尻市における囲碁大会を放映していたが、加えて独自の棋戦を組もうと考えていた。翌年度の第二回大会では加藤正夫九段、小林千寿五段を迎え、盛大な記念行事が開催され、CATVにおいては大々的な報道がなされた。そして加藤正夫九段が急死されたあと2回目の碁会が今年度の大会であった。

この大会の決勝戦はテレビ放映されるので愛好家には人気の大会になっている。既に来年度には故加藤正夫九段の直弟子で、茶の間でも大人気の梅沢由香里氏を招待するということまで話を進めていると佐藤社長からの宣言も出ている。

c) 後援

(イ) 長野県高等学校囲碁選手権大会（高校囲碁連盟・信濃毎日新聞社）

本学が県の中央に位置し、インターにも近く、囲碁の道具なども完備しているということから、また松商学園高校の丸山紀明先生も連盟に関係していらっしゃるということもあって、本学への会場利用の申し出が囲碁連盟からあった。本学はこれを受け、峯岸が窓口になって対応している。大学としては高校生に松本大学を利用していただくのは、特別の意味があると考えて便宜を図っている。

(ロ) 一就塾（窪田空穂記念館） 5月、7月、10月 藤沢一就八段

指導員：峯岸・倉科・中野静、アドバイザー：住吉

ももとは芝沢小学校に在任されていた山下同先生が、偶然のめぐり合わせで知り合いになった藤沢一就八段と意気投合して、子ども達への囲碁普及活動をお願いしたことが始まりの契機となっている。これに地元の窪田空穂記念館の設立に尽力されたキッセイ薬品の神沢邦雄氏が、囲碁の道具を寄付する形で塾の活動が始まった。山下先生は伝統文化である囲碁を普及することだけではなく、プロの棋士から真摯に学ぶことの重要性ややりたいことを見つける大切さとそのための努力の大切さ、人と接する上での礼儀や作法など多くのことを吸収させたいという思いを込めて始められた。この姿勢に共感した住吉が、側面からの支援に対応することになり、これまで6年以上の長きにわたって後援してきている。松本大学から

は峯岸、倉科、中野も指導者としての支援を買って出ている。

d) 協 力

市民タイムス中信地区アマチュア囲碁大会 3月26日 競技委員長：住吉広行
(主催：市民タイムス、日本棋院長野県本部・中信地区本部) 参加者約230名

中信地域で多数の読者数を誇る市民タイムス誌が、読者への感謝の意を込め、また地域社会において伝統文化の継承・発展を目指すという観点から十数年にわたって囲碁大会を開催し続けている。ここでも参加者数が増えるに従って、変則的なスイス方式による組み合わせで試合を進行させることが徐々に困難になってきた。そこで、松本大学(住吉)に競技委員長就任への依頼が来るようになった。これに対して、運営のノウハウを伝えるということで協力している。